
Little Goerg

ティレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L i t t l e G o e r g

【Nコード】

N 8 5 7 6 A

【作者名】

ティレ

【あらすじ】

僕の趣味は、暴力。脆い命に圧倒的な力を見せつける事が、大好きだ。

プロローグ

ヒトや物事に悩みそが爆発しそうなくらい没頭できるというのは、ヒトが生きる上での最大の喜びでありまた生きがいだと思う。

没頭する事は何だっていい訳だ。

例えを挙げるなら、

一人の異性を愛したり同性を愛したり、友達いっぱい作ったりはたまたその逆で親友と呼べる人を

少しだけ仲間にしてみたり。

人じゃなくとも仕事や趣味に夢中になってそんな自分に酔ったり、悲しんでる人を助けたり傷付けたり、誰かを虐げたり虐げられたり、それに快感を感じたり、

テレビの向こうに存在する二次元の

女性に萌えたりそしてそんな奴をまた虐げたり。

案外世界は、これで繋がっているのかも。

なんて考えるようになったのは、僕にも最近没頭できる事が見つかったからである。

それが何か、と?……ふふ、教えてあげないこともない。

僕がハマってるのは、暴力。それも圧倒的な。いやいや確かに没頭できる事があるのは素晴らしいなんてぬかしたのは僕だが

やっぱりこれは社会的に問題があるよねー、

とか自分で勝手に思いつつ、

僕の腕へと無防備に体を預け愛らしく鳴いているその小さな仔猫の

腹部に、

小ぶりのナイフをぶっ刺して、殺した。

——ああ、またやっちゃった……

断末魔の叫び、という程でもない猫の

ニャア！（ギャア、とも聞こえた）という鳴き声が

その短かった命の絶命を告げたのを確認すると、

僕はすぐに刺したナイフを抜き取って、

ドクドクと吹き出るように溢れ出す人間と

ほとんど変わらない色の血液を

まじまじと眺めた。

「くひひっ……あははあ」

不意に卑しい、というよりは不気味な笑い声が漏れる。

それもその筈、この無意味で理不尽な

殺戮こそが僕の趣味であり、快楽であり、生き甲斐なのだ。

これが真に没頭するという事だ。

もう自分で自分がおぞましいという程の域。

対象が猫なんかの小さめの

動物である限りまだマシだと思ふべきなのか、

だからこそタチが悪いのかは別として、

圧倒的な力を見せつけるにはこんな

無力でちっこい動物が恰好の材料となってしまう訳だ。

ちなみに僕は自慢じゃないが、こうして

猫を殺すまでの間ほとんど我を忘れていたような状態だった。

まじでまじで、ほとんど記憶が

残ってない。いや記憶が

無いっていうか、思考は働いて
いるけれど体は僕の意味で
動いてない、みたいな。

これは多分脳みそのすっごい
深い狭い暗い所に住んでる僕の
本能の黒い部分だけが、日々募る
ストレスとか怒りとか悲しみとかに
押し出されて表面まで出てきちゃって、さらにもう一つの人格みた
いな形で

形成されちゃったという
(あくまで僕の脳内ファンタジー)
没頭に没頭を重ねた者の
末路なんじゃないかなと、
僕はまた勝手に思っていた。
いやちょっとこれはさすがに
異常かもしれないが、これを
治したいとか常人になりたいとか
いう気持ちは一切無い。
別人格かどうかのは
無しにしても、だ。

僕は、この行為に
至高の喜びを感じている。
黒い僕も、普通の僕も同様に。
アリも蝶もバッタもネズミも猫も犬も
みんなみんな僕の前では無力。
圧倒的な力を有する人間の前では、
その力を取るに足りないものだ。

僕は僕という人間の下等に位置する
生物を虐殺し、力を見せつける事が
好きで好きで好きで好きでたまらない。

プロローグ（後書き）

お初にお目にかかりますテイレと申します。張り切ります。

第一話

先月のはじめ頃くらいだったかな。

近所（といっても隣り街だが）の住宅街の一角で殺人事件が起きたのは。

被害者は僕と同一年で17歳の女性。

名前は真田彩華、とかそんな感じ。

犯人は真田彩華の自宅に侵入し窃盗を試みたが、その時留守番で部屋にいた真田彩華に気付かれて大声で叫ばれ、刃物等を持っていなかった犯人は数分の乱闘の末にキッチンにあった出刃包丁で腹部をブスツとひと突き、刺し殺してしまったそうだ。

テレビ局とか新聞社とかとりあえずマスコミがわーって来たから僕も

野次馬魂で現場に行ってみたら、思ったより物々しくて野次馬もみんな飽きたのか知らんが一人もいなかったし、お前場違いだよって言われてるみたい

でちょっと寂しくなったので帰った。

で、何でそんなほろ苦いメモリアルを思い返したのかというと、だ

実はもうその犯人は事件の2日後間抜けに捕まって容疑者として扱われているのだが、今日。

事件当日から一ヶ月と数十日経った今日。その容疑者、飯森健人はなんと五年の執行猶予付きで懲役七年の実刑判決を頂いたらしい。

あんだって執行猶予お？ナメんなさっさと死にやがれ、殺人犯がよくもおめおめと太陽の下を歩けるもんだ。と切実に思う

動物虐待者の僕であった。というかもし散歩中に被害者である真田彩華のお父上に出会っちゃったりしたらどうすんだろ、会釈？とか？なんでやねん。

いや土下座？すみませんでしたーってか
いや無理。無理だろ。
パパンが殺しちゃうんじゃないのか、
そのすつとぼけた犯人。

憎さ余って憎さ千倍（なんじゃそりゃ）、俺の娘を返せこのクソバカ
ヤロー殺すぞゴルフって発狂しちゃう
んじゃないかと心配だ。と切実に思っている
動物虐待者の僕であった。

僕だって人間だ。
ちょっとした殺人犯への憤りや、
被害者に対する慈悲ならある。

僕の趣味は、
決して人を殺す事ではないのだから。

で、朝からふざけたニュースに一人憤慨する僕はちよつとオッサン臭いがこれでも一応高校生である。現役の。

成績は中の上、スポーツは経験ナシ。

友達もほとんどいない。まあ動物殺しちゃうような奴に友達ができるなんて到底おかしい話だが。

いや違う逆か。友達がたくさんいる様な奴なら動物を殺そうなんて衝動にかられる事はない。これはカタいな。

むう、クソッ、朝から何だか嫌な気分
にさらされてしまった。

どれもこれも全てあのにつくき

殺人犯、飯森のせいである。

きつとそうだ。

なんて訳のわからない怒りの矛先を僕には全く何も危害を加えていない飯森に向けながら、教科書をふてぶてしい程の乱暴さで鞆に詰め込んだ。

――午前七時四十五分。最寄りの駅のホームで学校前までの電車を待つ僕。悲しい事にこの世には通勤ラッシュというものがありこの時間帯の電車はどれに乗れども満員満員そりゃもうケンカ売ってんのかってぐらいパンツパンのギュウギュウだ。

そこに例え歴史上の偉人例えば

織田信長がいたとしても誰も席は譲れないし自分がどうにか確保できているスペースを織田さんに分けてあげるなんてもってのほかだ、たとえホトトギスの如く殺されるとしても。

もう何故か織田さんを引き合いに出しちゃうくらいすっごいもんなのだ。

ほら見ろーどんどん人が増えて来た。主にサラリーマンや僕のような学生。眠そうにもっさいあくびをする仕事できなさそうなおっさんや、コンパクトで念入りにメイクをするちよつとケバいめの女子高生。

毎朝見慣れた光景だが、その中に何かもどかしい妙な違和感があった。

なんでだろなと思いきやそのモヤモヤの原因はホントに一瞬で見つかった。

……変な人がいる。いや露出狂とかの類じゃないけど変、おかしいってなにあれだってあの服の色鮮やかさとアクセサリーの量。ヤバいってヤバいって片手のみに指輪腕輪合わせて軽く三十個は超えてんじゃない重力障害起こしちゃうよあんだ。

ピアスだって開けまくりで耳数えたら片方だけで五つはあった。

片耳しか見えないけどもう片方も
きっと壮絶なんだろう。

服だって有り得ない、長いTシャツ
だがどこの地球外生命体から搾り
採ったエキスを混ぜ合わせて出来た色
なんですかってくらい派手。

紫が黄色に襲われて助けに来た赤色が
更に黄緑に奇襲受けてるみたいな色。
で僕のこの表現で想像して思い浮かべ
て頂いた服のさらに一回り上を行
くらしい服を彼は着ている。

ズボンはブルッブルの超ダメージ
ジーンズだがそれはまだマシにしろ、
髪型。どうにかしてくれってかホント
にどうにかしろ。なんで髪の色まで
異星人エキス入りなの？で、ピン何十
本差してんだよ髪どんだけ束ねてん
だよ編んでんだよそれをまたどんだけ
ぶっといピンで

持ち上げてんだよおお！！

上げた髪の遅れ毛がまたオシャレ…？

僕はここまで派手さだけを追求した
人類の前衛的な芸術を現段階で
果たしてオシャレと呼べるのか
わからない。判断しかねる。

おお身に纏うものが派手すぎて気付か
なかったがこの青年、表情まで不気味
ってというか薄ら笑いを浮かべている。

怖えーこいつ怖えっもうアクセサリー数えんのやめとこ、

何されるかわかんないわ。

と怯えながらそっと目を反らした。

まあその派手さ故に彼に注目しているのは僕だけでは無い、駅のホームの九割の人間がその彼に視線を注いでいた。

さっきのケバい女子高生もうそ超

ありえねーって感じの汚い物を見る

ような目で青年を見つめて硬直して

いる。その女子高生もまあ派手なの

だが、彼と並べば1R10秒KO負けだ。

完敗だろう。

と朝のホームに突如現れた異界人を鑑賞しているうちにもう電車の時間。

たたりらららんたたたりらりんというような聴き慣れた訳の分からん音楽が流れると、少し間を置いて女性の声がスピーカーから流れて来た。

「まもなく、3番ホームに電車が止まります。白線の内側にお下が
り下さい」

俺は無視して白線の向こうに踏み込み、線路に沿ってカーブしながらこっちへ走って来る青色の電車を眺めた。俺は鉄道マニアでも何でも無いが、この角度から見える電車だけは最高に好きだ。カーブ具合とか色々が。だから毎朝こうしてお姉さんの注意を無視し白線を踏み超えてやや曲

がった電車を鑑賞する。別に見なくても後悔とかはしないが、いつからか日課になってしまったのだ。たとえば僕が動物を殺すのも同様。あくまで自然な、飯食って寝るのと一緒に生活リズムの中に

組み込まれてるっていうか。

なんてボーツとしてたら、隣からジャラつとした金属音が聞こえてきた。まるですごい数のアクセサリーをジャラジャラ着けてるみたいな。

すごい数のアクセサリー…？

ふと視線を隣に見遣ると。

「どわっ」

案の定そこにいたのはさっきの派手山派手男くん。いきなり横にいたもんだからどわっなんてみっともない驚き声を上げてしまい、おかげで見られた気付かれた。派手山派手男と

目が合っちゃった。

第一話（後書き）

アクセサリーは片手に30個も付けられるのだろうか

第二話

硬直した。ただそれだけだった。

充血してるしその上にカラコンを付けているから、目玉が全部真っ赤っ赤。しかも瞳孔開きっぱなしな感じのギョロツとした目。

怖い、怖い怖い怖い怖いマジで怖い。なんて言うんだろう、こいつの目が人間を見るために出来てるものじゃ無いような気がして。

超超、衝撃的だった。

小六の秋初めて学校の飼育小屋にいたウサギを刃物でメッタ刺しにした時、快楽と同時に得たあの核兵器級の衝撃に、似ているような気もする。

とりあえず固まって動こうにも動けない。電車が停止すると、僕の後ろに並んでいた人達は僕をスッと抜かし、だけど邪魔くさそうに車内に押し入り瓶詰め状態ににされてゆく。

あっという間に電車内は人の海……、
になってるんだと思う僕はこいつから

目が反らせないから見えないけど!!

気持ち悪いぐらい長い間見つめ合っ
たまま、僕と

そいつはそいつは一步も動こうとしない。

僕の場合は動けないのだが。こいつの
せいで。てか電車行っちゃうんです
けど。どうしよどうしよ遅刻する。

プルルル……

無情にも電車の扉が閉まる合図が

朝のホームに鳴り響く。やべー。

しかししかし窓から顔を出した車掌の
オッサンは電車を前に固まっている僕
を見て

「乗らねえんだなこいつ」
的な

判断をしたらしく、ムカつく程
さっさとドアを閉めてしまった。

プシュー。まるで僕の心境をそのまま
表したかのような間抜けというか
気の抜ける効果音。

で、不思議そうに僕ともう一人を見つ
めてるであろう電車の中の人の海。
見るなっ。見せ物じゃねえぞこらー。

がたん、たんたんがたんとやかましい
走行音は僕を置き去りにし、再び
優美なカーブを描いて次の駅へと
向かって行くのであった。ああ無情。

まあ、視線は固定されたままだが。

「……ニオウ」

え？

こいつ今

なんて？

「ニオウ君…ニオウ。少し違うけど」

何、何言っただこの人。ニオウ？
臭いの俺？風呂なら入ってるけど。
しかし暗かった。この人の声。

「殺してるでしょ、なんか」

「えっ、え？」

喉の奥から発せられたのは、意表を
突かれて出たすつとんきような声。

「最近だと、猫？好きなの？猫が？」
別に好きじゃねえ。

「あ、僕すごいでしょ、嗅ぎ分け
られるんだよね。血の匂いが」
何、何？やっぱ変人？
で俺はどうすりゃいいんだ。

「血の匂い、すか」

「うん血液型もわかるよ君O型？」

……だーいせいかい、マジかよー。

でもたまにTVで見るよなこんな奴。
特殊能力？っての？怪しいとは思って
たが、やっぱいるんだな世界は広い。
まあ血液型なんかは当てずっぽでも
わかるもんだが、動物殺しは別だろ。
死体でも担いでない限り第三者にばれ
る事は有り得ないし。でもちよっと、

やっぱキモチワルイな。こいつ。

「・・・楽しい？」

「へ？」

ピアスだらけのこいつの唇は
うっすらと動き小さな笑みを作った。
僕に興味を、持ったんだろうか。

「・・・楽しいですよ？」

正直に答える僕。こいつにこう言うと
なんて反応するだろう、どんな表情
するだろう。こいつの存在は僕の唯一
幼い感情、好奇心をこれでもかと
いうくらい掻き立てた。

「ふうん・・・」

人は殺そうと思わないの？」

「弱い者虐めが趣味なんで」

ようやくこいつの目が痛くなる程の
褐色にも、存在感にも慣れてきた僕。
しかしそんな安堵を吹っ飛ばす

心臓を貫く稲妻のような、

「僕もあるよ。人殺したこと」

一言。

冗談はやめとけて。

「突き刺したナイフから伝わって来る
内蔵の感触とか体温とか血を噴き出す
真っ赤な新しい傷がたまらなく好き、
好き、好きなんだよ。君と一緒に」

一緒にすんなよ。
というより、

「・・・よーつくも、んなタチ悪い
冗談思いつきますね。最近この辺で
殺人事件あったの知ってるでしょ？
さすがにちよっと不謹慎ですよ」

マジで、常識外れな男だ。小学生じゃあるまい
しそんなしょうもない事・・・。

「ここだけの話本当だから言ってるん
だけど。小学生じゃあるまいしー」

気だるげに伸びる語尾。

はあ？こいつ本当ヤバいんじゃない、

「じゃ付いてきてよ少年。

いいもん見せたげよう」

「おっわ」

と声を上げるも僕の腕はそのジャラジャラうるさい白い手にぐいと体ごと引っ張られ抵抗し引っ張られの繰り返しでもじゃあ学校今日はもうサボれるなんて思いつつ好奇心とサボりたさに負け強制連行を許すのであった。

もしヤツが本当の事を言っているならこれから見るものは人間の死体なんだろうなあなんてブツ飛んだ妄想をするが、そこに恐怖は微塵も無かった。

なんとなく、本当になんとかだが。

こいつは僕を殺さないと思うから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8576a/>

Little Goerg

2011年1月18日15時41分発行